

ネギ定植後の定期的な防除はネダニ類を減少させ、ネギの品質は向上する			
[要約] ネギを加害するネダニ類に対して、栽培初期にテフルトリン粒剤、プロチオホス乳剤及びブプロフェジン水和剤の定期的な処理を防除体系に組み込んだ場合、防除効果が高く、加えて、ネギの収量及び秀品率は向上する。			
茨城県農業総合センター園芸研究所	令和7年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

近年、茨城県のネギ栽培において腐敗性障害が多発し問題となっている。本障害の発生は軟腐病や他の病原菌、虫害等が原因となる可能性もあり、不明な点が多い。今年度は腐敗性障害を助長させる可能性があるネダニ類を対象に、ネギ栽培初期の防除として、ネダニ類を対象とした灌注剤及び粒剤を防除体系に組み込んだ場合の防除効果を把握し、収穫後のネギの品質に与える影響を評価する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) ネダニ類を対象とした薬剤処理なしの対照区ではロビンネダニの株当たり個体数は、7月下旬から8月上旬にかけて増加し始め、10月にはピークに達するが、定植時、初回の土寄せ時及び二回目の土寄せ時に定期的にネダニ類に対し防除効果の高い薬剤（令和6年度主要成果（技術情報））を処理した防除区（表1）では、対照区と比較してロビンネダニの密度は抑制される（図1）。
- 2) 防除区から収穫されたネギの株数及び調製後の株重量は、対照区と比較して多い（表2）。同様に、防除区のA品率は対照区と比較して高く（表2）、栽培初期のネダニ類を対象とした定期的な防除は、収量・品質を向上させる。
- 3) これらの結果から、栽培初期におけるネダニ類の密度は最終的にネギの収量や品質に影響を与える。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本試験では植え溝を掘り苗を定植した。表1の初回の土寄せは植え溝の埋め戻しにあたる。同様に、2回目の土寄せは植え溝の埋め戻し後の1回目の土寄せにあたる。
- 2) 同一系統（作用機構）の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する可能性があるため、薬剤の処理前後には異なる系統の薬剤を散布する
- 3) ネダニ類に対する薬剤感受性検定の結果、プロチオホス乳剤の殺虫効果は高い（令和7年度主要成果（技術情報））。しかし、一部の個体群においてプロチオホス乳剤に対する感受性の低下が見られるため、使用後は防除効果をほ場でよく確認する。
- 4) ネギの栽培期間は長期に亘り、複数回の土寄せにより地表面からネダニ類が寄生する茎盤部までの距離が長くなるため、栽培後期にはネダニ類に対する薬剤の防除効果の低下が予想される。そのため、土壌表面からネギ茎盤部までの深さが比較的浅い栽培初期に、効果的な薬剤を用いたネダニ類の防除に努める。
- 5) 本試験で用いた薬剤は、令和8年3月1日現在、ネギに対して登録のある薬剤である。

4. 具体的データ

表1 本試験の実施ほ場に処理した薬剤の履歴（令和7年）

処理日	防除区	対照区	備考
4/17	テフトリン粒剤 ¹⁾		定植時処理
5/15	テフトリン粒剤 プロチオホス乳剤		初回土寄せの 前日に処理
5/22	クロラントラニプロール水和剤	クロラントラニプロール水和剤	
6/9	*オキサチアピロリン・ マンジプロバミド水和剤 ²⁾	*オキサチアピロリン・ マンジプロバミド水和剤	
6/12	*ベンチオピラド水和剤	*ベンチオピラド水和剤	散布処理
6/18	ブプロフェジン水和剤 *シメコナゾール粒剤	*シメコナゾール粒剤	二回目土寄せ の前日に処理
7/1	*トルクロホスメチル水和剤	*トルクロホスメチル水和剤	
7/14	*フルトラニル粒剤	*フルトラニル粒剤	
7/17	スピネトラム水和剤 *プロバナゾール粒剤	スピネトラム水和剤 *プロバナゾール粒剤	三回目土寄せ の前日に処理
7/29	*ベンチオピラド水和剤	*ベンチオピラド水和剤	株元灌注処理
7/31	チアメトキサム水溶剤 *オキシロニック酸水和剤	チアメトキサム水溶剤 *オキシロニック酸水和剤	
8/14	アバメクチン乳剤	アバメクチン乳剤	
8/22	プロフラニド水和剤	プロフラニド水和剤	
9/2	シアントラニプロール水和剤	シアントラニプロール水和剤	
9/24	フルキサメタミド乳剤 *テブコナゾール水和剤	フルキサメタミド乳剤 *テブコナゾール水和剤	

- 1) 太字の薬剤は、令和8年3月1日現在、ネギのネダニ類に対して登録されている殺虫剤である。
2) *が付された薬剤は殺菌剤を示す。

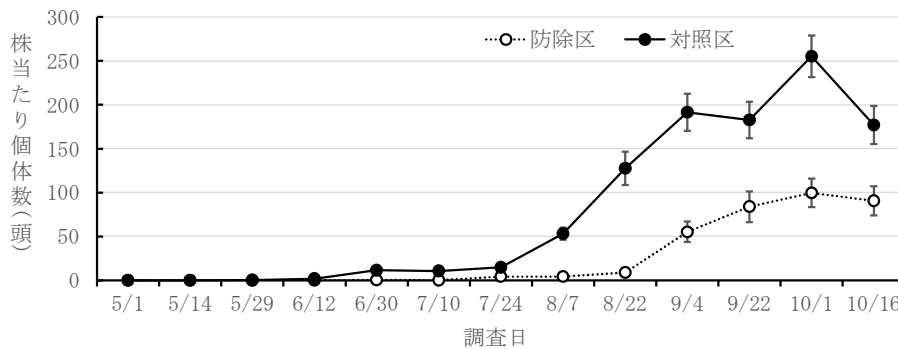


図1 各試験区における株当たりロビンネダニ個体数の推移 (平均値±標準誤差) (2反復のデータの合計)

※試験場所：園芸研究所内ネギほ場

供試品種：関羽一本太；播種、令和7年2月6日；定植、令和7年4月17日；畝幅、90.0cm；株間、5.0cm。

区制：防除区、及び対照区の計2区；1区 25m² (9.5m×0.9m×3ウネ)、2反復。

薬剤処理：表1を参照。

調査方法：各調査日に各区から20株をランダムに採集し、実体顕微鏡下にて各株の茎盤部に寄生するロビンネダニを計数した。

表2 各試験区におけるネギの収穫株数、株当たり調製重、A品率 (2反復のデータの合計)

試験区	収穫株数 (本)	株当たり調製重 (g)	A品率 (%) ¹⁾
防除区	411	106.8±42.8	69.1
対照区	337	80.5±37.1	51.5

1) JAつくば市の出荷基準に従い、等級(太さ)が2S以上かつ葉身・軟白部に折れ・曲がりがない株をA品とした。

※試験場所、供試品種、区制、薬剤処理：図1を参照。

調査方法：令和7年10月27日に、各区の各畝について中心部3mの範囲からネギを収穫した。JAつくば市の出荷基準に従い調製後、各株の軟白部の長さ、太さ、重さ、折れ・曲がり等を記録した。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

高温期に多発するネギ腐敗性障害の発生要因の解明および総合防除技術の確立・令和5年度～令和9年度・病虫研究室